

---

# 銃と魔法と眼帯とメイドモノ！

ハモニカ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

銃 と 魔法 と 眼帯 と メイド モノ ！

### 【Nコード】

N5890Z

### 【作者名】

ハモ二カ

### 【あらすじ】

どうも、あたしはファルケン家に仕えるメイド、フランと申します。今日も今日とてお嬢様のお世話に明け暮れる日々を過ごしております。……はて、大切な事を言わなければいけない気がするのですが、覚えてないので失礼させてもらいます。では

（ここからは作者が引き継ぎます）この作品は実際の某冒険者育成ゲームとは一切関係ありません。関係ありませんったら！大切な事なので2回言いました！それとキーワードですが、まだ出

てきていないものは」 で囲んでおりますので、ご理解ください！ その他、適時キーワードは追加、もしくは変更されますので時々キーワードを見ると何か分かるかも？ 一応キーワードは本編で出てきたらカッコを取る予定ですが、忘れていたらご報告くださいませ。

## 第00話 始まりの夢（前書き）

皆さん、メイドと聞いてまず初めに誰を思い浮かべますか？

作者はロベルタでした。だから銃なのかも……。

これ、ある意味駄目な例ですかね？w

まあ、

始めましょうか！

## 第00話 始まりの夢

暗い。

目を閉じている訳ではない。

瞬きを試みるが、閉じた時と開いた時の暗さはほとんど変わらない。  
い。

ただ、声が聞こえる。

女性の声だ。

酷くノイズがかかっていて、ほとんど聞き取る事も出来ないのだが、  
自分に向かって何かを言っているように思える。

声の主に心当たりはない。

いや、思い出せないだけなのだろうか。

物忘れが激しい自分の短所が改めて嫌になる。

記憶が曖昧になるおかげで、大切な事も、何もかも、時が経てば零  
れだしてしまう。

大切な人との思い出も。

楽しかった記憶も、悲しかった記憶も、今の自分を形作ったであろう全てを。

闇の中でふとそんな事を考えてしまう。

この自問自答もおそらくこれが初めてではないだろうし、最後になる気もしない。そのうち、こんなことを考えていた事すら忘れてしまうのだから。

悲しい、とは思わない。

いくら大切な思い出も、忘れてしまえば結局有象無象の記憶の中の1つであることに変わりはないのだから。

だが、記憶を共有した者が悲しむ顔は見たくない。

それくらいの感情はある。

声がまた響いてくる。

先ほどより幾分か鮮明になったようだが、それでもその言葉を判別するにはいささかノイズが酷い。

自らの意志は必死に言葉を理解しようとしている。

にも関わらず脳がそれを拒否しているかのようにノイズをかけてしまう。まるで思い出させないようにしているかのようにだ。

あなたは誰？

声に向かってそんな事を尋ねてみるが、返事はない。

広い部屋で声が反響しているようにも聞こえ、同じ言葉を何度も言っている。

酷く切迫しているように聞こえる

それが何を意味するのか全く理解できずに、ただぼんやりとそれを右の耳から入れて左の耳へと流していく。

あたしは、誰？

先ほどの問いを思い出して、そんな事を考える。

いや、名前はある。

大切な人から貰った、大切な名前。

埋もれていく記憶の中で、決して失いたくないと心の底から思えるものだ。そしてもちろん、それを与えてくれた人も忘れたくない。

だが、それが仮初めの名に過ぎないのは自分でも分かっている。

生まれて十数年、名無しの権兵衛であつたつもりはない。

つまりは、本名という事だ。

最愛の両親から貰ったであろう自分の本当の名前。

思い出そうにも、そもそも親の顔すら覚えていないのだ、それについて考える事すら滅多にない。

あたしは……

不意に、声が鮮明になってくる。

起きて



「ん……」

少女は目を覚ました。

それほど豪華ではないが、決して貧しくはないベッドの布団の中でもぞもぞと足を引っ張る眠気を振り払ってベッドから脱出すると、窓のカーテンを横に引く。

朝の眩しい日差しが部屋に差し込み、少女は眩しそうに目を細める。

「……妙な夢を見ていたような気が……」

何か、心に引っかかる、そんな夢を見ていたような気がするが、夢の内容は不思議と頭の中に浮かんでこない。

首を傾げながら少女は窓を開け、部屋に朝の涼しい風を招き入れる。

壁掛けの時計に視線をやると、時計の針は丁度5時30分を指していた。

早起きがこの身体に馴染んだのも随分と昔のように思われる。

とはいえ、この時刻に起きなければ仕事が出来ない。

少女は部屋の隅にチヨコンと置かれた机に向かうと、机の上に置かれていた黒い物を手に取る。布のようだが、形が独特だ。中央の幅が広くなっており、隅が著しく細くなっている。

少女はそれを顔の前に持つてくると丁度顔の左半分が隠れるようにそれを押し付け、細くなった部分を頭の後ろに回して慣れた手つきで結んでいく。

鏡を見る必要すらなく、その黒い布、俗に眼帯と呼ばれるものを装

着した少女はベッドの布団を畳んでシーツに出来たしわを出来る限り手で伸ばしておく。

それを終えて少女はようやく着替えを始めた。

少女の身体には不釣り合いな大きさのクローゼットの扉を開くと、そこには数着同じ色、形状の服がかかっていた。少女はあまり考える事もなくそのうちの一着をハンガーごとクローゼットから取り出すとベッドの上に置いてブカブカの寝間着を脱ぎだす。

とてもじゃないが少女の小柄な身体には合っていないところを見るに誰かのお下がりなのかもしれない。

寝間着を脱いで先ほど取り出した服を手早く着ると、そこでようやく少女は鏡の前に行き、全体に不自然なところがないか確認する。

白と黒を基調とした服、フリルが特徴的な白いエプロンと黒い服を組み合わせたような服を鏡越しにしげしげと見つめ、本来とは反対側に折れてしまった部分を指で直していく。

長い茶色のウィッグを少女は自分の本来の髪の色である黒が見えないようにしながら装着、その上から机の引き出しに入っていた白いカチューシャをつける。鏡の前におかれた小さな瓶の中に浮かぶ茶色いコンタクトをぶれずに目に入れ、鏡の前に立つ。

これが少女の仕事服だ。

少女は鏡で最終チェックを済ませると満足げに頷いて少女は部屋の扉へと歩き出す。

ドアノブには革製のベルトが引つかかっている。そしてそのベルトにはホルスターが付いており、黒光りする鉄製の物体がホルスターに収まっている。

少女は扉を開く前にその俗にガンベルトと呼ばれる革製のベルトを服の上から腰に巻きつけるとホルスターから少女の顔ほどもあるうかという巨大な銃を抜く。

黒光りするその銃はどこどころ塗装が剥けているが、手入れ自体は隅々まで行き届いているようだ。回転式の弾倉を開いて中に何も入っていない事を確認し、一度撃鉄を上げて軽く引き金を引く。

金属が金属を叩く甲高い音が響き、撃鉄が正常に動作することを確認する。

少女は30センチはあろうかというその銃をホルスターに戻すとホルスターの横についたポーチを開ける。

中には丁度先ほどの弾倉に収まりそうな大きさの丸い球が無数に入ったケースが収納されていた。中身が空ではない事を確認するとポーチを閉じる。

少女はガンベルトを掴んで思い切り回転させ、ホルスターを丁度背中に戻って前からは見えない位置まで移動させる。

「さて、お仕事お仕事」

少女は1人小さくそう呟くと部屋の扉を開いて廊下へと出ていった。

## 第00話 始まりの夢（後書き）

はい、どうも、おはこんばんちは、作者のハモニカです。

この度はこの作品、『銃と魔法と眼帯とメイドモノ！』を左クリックして頂きありがとうございます。

ゆっくりと、まったりと、急がず焦らず、二日に一回更新なんて自殺行為はしないよう行きますので、完結までお付き合いして頂ければ幸いです。

『銃と魔法と眼帯とメイドモノ！』、略して『とととモノ！』

始まります！

パクリじゃないです！

読めば分かります、きつとー！（キリッ

それと、誤字脱字含め、感想を頂けるとハライソに昇ってしまうくらいハモニカは喜びますので是非、ご感想を下さい！

ただ、ハモニカはチツキンなので批判的なご感想はかなーりソフトな言い方をお願いします。かなーり効きます、それこそ想定外に。

では！

## 第01話 メイドの朝は早い(前書き)

とりあえず、言いたい事は第00話の後書きで言ったので、レッツ  
ラゴー。

## 第01話 メイドの朝は早い

「おはよう、フラン」

メイドの朝は早い。

自分が仕える主が起きる数時間前には眠気を地平線の彼方へと吹き飛ばして朝の仕事をこなさなければならない。

「おはようございます、メイド長」

眼帯をした少女、フランが広いダイニングに顔を出すとフランと同じ格好をした女性がテーブルの上を綺麗に磨いていた。

美しい金髪を腰まで伸ばしたこの屋敷のメイド長、メリスは威厳のある表情を変えことなくフランに挨拶をしてきたため、フランは軽く会釈をするとダイニングに隣接した調理場に向かう。

「おはようございます」

調理場はダイニングに隣接しているとはいえ、少々距離がある。もちろん、朝から調理している音などで目を覚まさせないためだ。特にこの時間帯は主と食事の時間を被らせないように早起きしたメイドが朝食を取るために否応なく物音は増えてしまう。

フランは調理場に入ると中にいた男性に声をかける。



男性はフランを一瞥すると小さく頷き、座っていた椅子から立ち上がるとキッチンの前に立った。

男性の名はデックス。

この調理場の王として君臨している。フランがこの屋敷の世話になる前からいるため、彼女は詳しい経歴を知らないが、腕は確かだ。作れない料理はない、とまで噂されているほどで、事実常人が思いつく料理はたいてい作れる。

デックスの調理姿を眺めながらフランは近くにあつた椅子を持ってきてキッチンのスペースがある場所の前に置き、その上に腰かけて朝食を待つことにした。

しばらくしてデックスが皿にハムエッグとサラダを盛り付けてフランの前にやって来た。フランがそれを見て満面の笑みを浮かべると寡黙で無表情なデックスの表情も一瞬緩んだように思える。

デックスはこの屋敷の調理場を1人で切り盛りしている訳だが、主であろうと使用人であろうと分け隔てなく全力を以て調理してくれる事で評判だ。定期的に新作を考案してはその評価をメイドや執事に頼んでいるため、彼らの間ではちょっと得をした気分になれるそうだ。

フランは目の前に置かれたハムエッグと近くに切った状態で積み重ねていたパンを一切れ取って今日の朝食とすることにした。

「では、頂きます」

パンを手を千切って一口大にすると口の中に放り込む。ジャムなど

何もつけずとも素の味で満足できるのも、このデックスの料理の特徴だ。

サラダにフォークを刺そうとした時、調理場の扉が開いてフランと同じメイド服を着た少女が入ってきた。青い空を想起させる青い目と髪が特徴的で、まだどこか幼さが残っているような少女はフランに気が付くと笑いながらその隣に椅子を持って歩いてきた。

「おはよう、フラン」

「おはようございます、クレア」

身長はフランとほとんど変わらない。一応フランよりも年上という事のはずなのだが、童顔のおかげで幼く見えてしまう。

「ナトリ、あたしにも同じのを頼むよ」

ナトリとは、デックスの名字だ。デックス・ナトリ、大抵の者はデックスと呼ぶが、ナトリと呼ぶ者も少なくない。とはいえ、片方しか使わない者の方が珍しく、その時の気分で呼び方はコロコロ変わっている。

デックスはクレアに小さく頷くと再びキッチンに向き合いフライパンに流れるような手つきで油を引いてハムを敷き、卵を落としていく。

「さっきね、ダイニングで姉さんに怒られちゃったよ」

「メイド長に？ 今度は何をしたんですか」

クレアはメイド長であるメリスの妹だ。自分であろうと他人であろうと厳しいメリスも妹にだけは甘いかと思えば、そんな事はなく、むしろ妹であるがゆえに厳しい面もある。

そのため、クレアがメリスに怒られるのは別段珍しい事ではない。

だが、今日のようにそれを話すのは珍しい。

そう思ったフランは食事の手を休めてクレアに顔を向けた。

「それがねえ、『後輩より起きるのが遅いのは先輩として失格だ』、ですって。フラン、明日からあと5分寝坊してえ」

今にも泣きそうな表情をするが、こういう時はたいてい同情を誘っているのだ。特に怒られた原因が目の前にいるのだから、そう言いたくなるのも分らないではない。

「……クレアがあと6分早起きすれば済む話じゃないですか」

何事かと心配してしまった自分と、大事のように文句を言うクレアに呆れながらそう言っていると、クレアが足をバタバタさせながら抗議を始める。

「良いじゃない、フランの仕事は7時からでしょう？　ならそれくらい……あだっ」

クレアの抗議を遮る様に綺麗に拭かれたお玉がクレアの前頭部を軽く叩いた。見ればデックスが皿を持って立っていた。

「ほら、デックスも言ってるでしょう」

「……言ってないよ……」

額を摩り、渋々黙り込んだクレアはパンを頬張ってすぐに笑顔になる。

「んゝ やっぱり焼き立ては美味しいねゝ」

数十秒前の顔が嘘のように屈託のない笑顔に戻ったクレアに、フランもホッと溜め息をついて自分の食事に戻る。

「デックスはわざわざあたしたちのためにまで焼き立てのパンを作ってくれるし、本当に他の屋敷の料理人も見習うべきね」

「それはそうですね。まあ、ここ以外をあたしは知らないんですけど」

他を知らなくても、デックスがこれ以上になく出来た男であるのは分かる。黙っていても自分のやるべきことと相手が望むことを合致させるという技を習得しているのだ。これで愛想も良かったらそれこそ完璧な人間になるだろう。

フランは先に来た分、クレアより幾分早く食べ終わった。

これからが本来の仕事であるデックスの手を煩わせるわけにはいかない。なので食事の後片付けはフラン自身がやる。「ごちそう様」とデックスに礼を言って皿とコップ、フォークなどを重ねて流し台へ向かう。

流し台は昨日の夜に水跡1つなく拭かれたままの状態、フランは

少し得をしたような気分になりながら蛇口をひねり、水を出して皿を洗い始める。

さすがに主が使う食器とは分別がされているが、次に誰が使うか分からない食器であるため、いつものように丁寧に、次に使う人が眉を顰めないように丹念に汚れを落としておく。

それが全て一段落した辺りでようやくクレアが食事を終えたが、その時には料理場の時計が6時20分を指そうとしていた。

「クレア、あなたは今日はメイド長と同じシフトだったんじゃないんですか？」

「ほえ？ …………… あ」

「…………… はあ、洗っておきますから言い訳を考えておいた方がいいですよ」

「うわわ、1日2回なんてどんな顔して行けばいいんだよ……………」

今度こそ本当に泣きそうになっている。

さすがにこれには同情する。

メリスはとにかく厳しい。先ほどのクレアのようにちょっとした事から徹底的に教え込まれるため、フランもこの屋敷に来た頃は苦労した。

だが、その分面倒見が良いのも確かで、相手の物覚えが悪いからと言って文句を言ったり、放り投げたりは決してしない。あくまで自

分の仕事は徹底的に仕上げるのが彼女のモットーだ。

今日のシフトではメリスとクレアが朝の掃除当番なのだ。掃除はなるべく早い時間帯に行われ、主が起きてくる頃には埃1つない状況にしておかなければならない。

本来掃除は6時頃から行われる予定なので、クレアも十分間に合う時間帯に起きているはずなのだが、食事にかまけている間に時は無情にも過ぎ去ってしまっていた。

「はわわ……」

情けない声を上げながらクレアは調理場を慌ただしく飛び出していた。

「まったく……」

先輩のはずなのだが、先輩らしい頼もしさの欠片もないクレアにため息をつきながらフランは手早くクレアの皿も洗っていく。

洗った皿は隣のかごに移していき、最後の皿を洗い終わるとタオルで手を拭いて一度時計に視線を向ける。時計は6時45分を指している、フランの仕事が始まる時間が近づいている事を示している。

「……えーと、デックスさん、今日のお嬢様の朝食は？」

デックスに顔を向けると、デックスがキッチンの引き出しから1枚の紙を取り出し、フランに手渡してきた。そこにはフランの求める朝食の献立と使われる材料、さらにはその生産地までが事細やかに書かれている。

フランは書かれている字を目で追いながらそれを頭の中に叩き込んでいく。

「これだけは慣れませんね……」

一通り目を通すと紙を裏返して書かれていた情報を暗記できているかブツブツと呟き始める。何を聞かれても答えられるように覚えていく訳なのだが、生産地などはそう毎日変わるようなものではない。それでも頭に入らないためにフランは毎日その日の献立をなるべく記憶の新しい場所に入れる必要がある。

「ええと、スープのトウモロコシは……ファイ、……フィル、あれ、フィリ？」

そして案の定頭に入っておらず、何とか思い出そうと頭を抱えるがどうしても出てこない。

「……フィリアコフ産」

「そうです、フィリアコフ産です！ ああもう、デックスさん、もっと短い名前の土地から仕入れられないんですか？」

それは無茶だ、という視線だけが返される。

材料の仕入れ先は基本的にデックスが決めている。彼自身が現地に赴き、納得がいく質、量、そして価格であればその場で交渉しているそうだ。

そのため、季節の変わり目になると時折デックスが調理場を空ける

時がある。そう言う場合はメイドと執事で切り盛りするわけだが、デックスと比較して味が落ちてしまう事は回避できない問題だ。デックスの料理の腕に張り合おうとする人間が過去にはいたそうだが、その無双っぷりの前に誰一人として勝利を収める事は出来なかったそうだった。

あのメイド長であるメリスでさえ、勝利は叶わなかったとか。

そのおかげでデックスはこの調理場において絶対的な権力者として君臨している。彼が許さなければ調理場で調理する事すらままならないと言っても過言ではないし、そこまでして調理しても結局は彼と比較され負けるのが見えているこの屋敷の人間はそんな事をしない。

「むう、朝食はまだ覚えやすいはずなんですけど……」

朝食は寝起きという事もあり、さっぱりとしていてあまりたくさん出さない。そのため問題はむしろ夕食である。

それなりの量を出すし、必然的に材料も増え、覚えなければならぬ事が増えていく。朝からこの調子では今日一日苦勞してしまう。

そんな事を考えながらも一度献立と材料の産地が書かれた紙とにらめっこをし始める。

時計の針は6時55分を指そうとしていた。



「はあ、結局全部は頭に入らなかった……」

朝食は基本的にフランたちが食べたものと変わらない。フランたちと違うのは温かいコーンスープが付いていることくらいだ。覚えるべき材料にしても、小麦や卵、肉と言った比較的安定した産地を持つものだけだったのだが、それでも小麦の産地を覚えると卵の産地を忘れ、卵の産地を覚えると肉の産地を忘れるという、どうにもならない状況に陥ってしまった。

「お嬢様、トウモロコシの産地だけは聞かないでくださいね……」

最終的に妥協したのはトウモロコシの産地だ。一番最初に覚えたような気もするのだが、そんな事もすでにフランの中では大昔の事になっている。

フランは今この屋敷の実質的な主の寝所へ向かうために廊下を歩いている。朝の日差しが窓から差し込んでおり、心地よい涼しい風がフランの頬を撫でていく。

時間は定刻きっかり、遅すぎず早すぎずと言ったところだ。そして

たとえ遅くなっても廊下を走るような事はしない。

足音を立てず、服が擦れる音すら極力出さないように心がける。

「……はあ」

フランがメイドの基本的な事を守ろうとしているのに、屋敷のどこからクレアの悲鳴が聞こえてくる。大方、メリスに叱られているのだろうが、本当に年上かと疑わせるほどクレアは子供っぽいところを持ち合わせている。

「お、フラン。時間きっかりだな」

目的地である部屋の前にたどり着くと、既にその扉の前には1人の執事が立っていた。背が高く、茶色の髪をオールバックにしているその執事はフランに気が付くと胸ポケットから懐中時計を取り出して時間を確認した。

「すみません、グラントさん。朝の献立が頭に入らなくて」

「ふむ、では私も朝食に付き合おう。分からないことがあればフォローしよう」

わずかに小じわが見えるその執事、グラントは気さくに笑みを浮かべてフランの頭を撫でた。

傍から見ていれば父と子が話し合っているようにも見えるかもしれない。とはいえ、このグラント、40代後半を思わせる風貌だが実年齢は30代、歳の割に老いて見えてしまう事を彼自身もコンプレックスにしている。

特に年齢の話題を出されると年頃の女性を思わせるほど敏感に反応するほどだ。

フランはグラントの言葉に満面の笑みを浮かべる。

「グラントさん、この感謝は絶対に忘れませんよ」

「はは、それほど大それたことでもないだろう」

グラントはメリスと共にフランをメイドとして鍛えてくれた人物だ。メリスが家事全般を教えてくれたのに対し、グラントは外での仕事を中心に教えてくれた。

特にデックスがいない時や、自分たちで何か食べようと思った時のために近くの市場で食糧調達が出来るように実地で練習させられた時は、さながら小さい子供に初めてのお買い物させる父親のような目で見られてしまった。

あの頃はまだ頼まれた食材のイメージと実際の食材の姿が一致せず、間違った食材を買ってしまう事も多かった。今でこそとんでもない物を買うような事はなくなったが、それでもたまに似たような食材を間違える事があり、その度にメリスやデックスにはため息をつかれてしまう。

「そういえば、奥さんの調子はどうですか？」

「今日の献立も覚えていないのに妻の事は覚えているのか」

「うぐ……」

悪気があつて言っているのではない事はその表情を見れば分かるのだが、それでも何か頬を叩かれたような気分になってしまう。

「やっぱり、印象的な事は頭に残るっていうか、なんというか……」

「まあ、お嬢様の食事と私の妻を両てんびんにかけるなら、そうなるかもしれないが……」

さらつと執事として随分と失礼な事を言っているが、現在の彼の妻の状態がそれほどなのは確かだ。

「はは……、確か4カ月、でしたか？」

「そうだ、安定期になつて随分だが、最近お腹が大きくなつてきてな。ようやく実感が湧いたよ」

話の内容からも分かる様に、グラントの妻は妊娠している。執事としては既婚者であるグラントは現在3人家族、もうじき4人目の家族が加わるうとしているところなのだ。それ故にグラントも最近の仕事は早く切り上げたり、シフトを他のメイドたちとは軽くしている。

仕事と家族を両立させている数少ない成功例らしく、毎朝早い時間帯に自宅から徒歩通勤している。フランたちのように住み込みで働いている者が圧倒的に多い中ではかなり珍しい部類に入る。

「今日も早く仕事を終わりに？」

「そのつもりだが、まあそうも言つてられん状況になりそうなので

なあ……」

フ란の問いにグラントが渋い顔をする。

「……確か、お嬢様はクラスは……」

「うむ、私たちの予想通りになれば早帰りともいかん。妻にも今日明日は遅くなると伝えているし、問題なかるう」

グラントの言葉にフ란は小さくため息をついてしまう。

ポケットから小さな手帳を開き、予定表のページに目を通すと、2人の懸念通りの事が書かれている。物忘れが激しいフ란にとって手帳は必要不可欠、決して忘れる心配をしないで済む。とはいえ、時折「書いたという事実」すらスッポリ忘れてしまう事もあるのだが。

「先の事をくよくよ考えていても仕方ないな。さて、仕事に移ろう」

「ですね、では」

グラントが気を取り直して着ている服の襟を正し、フ란も自分の服が不自然ではないか確認する。

そしてフ란が準備万端になったのを確認してからグラントは両開きの扉を軽く二度ノックすると「失礼します」と言っでドアノブを回した。

グラントに続いて部屋に入ると、広い寝所が視界に入る。入って左手にベッドがあり、布団の中で丸まっている少女がいる。グラント

は小さくため息をつきながらおそらく昨日のままの状態であったのだろう机の上の本や椅子の背もたれにかけられたままの服を片付け始める。

フランはそれを横目にベッドの横に立つと布団の中を覗き込む。

ベッドでは燃えるような紅い髪の少女が規則正しい寝息を立てている。

「お嬢様、朝ですよ」

それがフランの始業ベル代わりでもある。

## 第01話 メイドの朝は早い（後書き）

感想、誤字脱字報告、お待ちしております。

第02話 メイドの仕事に他意はない（前書き）

さ、最初くらい飛ばして書いてもいいですよっ!？

最初ですからっ！



## 第02話 メイドの仕事に他意はない

珍しく、昔の夢を見た。

それは今でも忘れるわけがない、初めて彼女と出会った日の夢。

父と共に外出していた際に、道を外れた木の陰で倒れ込んでいた彼女を見つけた時は、本当に驚いたのを今でも覚えている。

あたしは混乱するあまり何をすべきか分からなかった。血まみれでボロボロの服を着た自分と同じくらいの少女を見て、冷静に対処できるのならはその人間は賞賛に値する。

さすがのあたしも気が動転、後から馬車を降りてきた父は最初こそ目を見開いて驚いていたが、すぐに仕事人間の顔になって自分が羽織っていたローブを脱ぐとそれで少女の身体を包み込んでヒョイと持ち上げた。

決して肉体派、とは言えない父でも軽々と持ちあがったのだから、あの時彼女がどれほど衰弱し、やせ細っていたのか想像に難くない。

あの時、少女の顔の左半分には血で白い所がないほどの包帯が巻かれていた。

あたしはそれが意味するところを理解せずに、包帯を交換しようとした。

だから、正面から見てしまった。

包帯の裏に隠されていた彼女の顔の左半分を。

見るも無残に焼き爛れたようになっていて、とてもじゃないが直視して良いものではなかった。

そして案の定、あたしは胃の内容物を道にぶちまけてしまった。

よほど長い間、適切な処置もされずに放置されていたのだろう。行き倒れていた間に蛆が湧いていたその傷痕は彼女がどれほど過酷な人生を歩んでいたかをこれでもかとあたしと父に見せつけてきた。

あの頃は目立った騒乱もなかった。

何者かに襲われて、命からがら逃げのびてきたのか、とも考えられたが彼女のボロボロの服の間から覗いていた黒光りする鉄の物体を見て、彼女がまともな世界に生きていなかった事を思い知らされた。

こんな夢を見たが、あたしは悪夢とは思わなかった。むしろ懐かしい思い出を思い出すことが出来て懐古の情に包まれてしまったほどだ。

彼女とは今では主従の関係以上に親しい。

あたしは彼女に絶対の信頼をおいているし、彼女もきつとそうだろう。

こんなことを考えていると自意識過剰かと思われてしまいそうだが、事実なのだから致し方ない。

しかし、なぜ今になってこんな夢を見ているのか不思議でならない。もはやこの記憶はさして重要ではない。彼女はもうあの時の彼女ではないし、前を向いて歩いている。彼女にあの時点以前の記憶がないのは不幸中の幸いだ。

あんな傷を負うような過去を思い出してほしくなかったのはおそらくあたしの屋敷の者の総意だろう。

父は彼女の素性を探ろうとさまざまなパイプを駆使していたようだが、不思議な事に彼女に関する情報は一切なかった。本来生まれた時に作られる戸籍すら残されていなかった。

あれ以来、父が彼女の調査を続けているかどうかあたしが知る術はない。

あたしも彼女の過去をそこまでして知りたいとは思わないし、知りたくもない。あたしにとって大切なのは今なのだから。

そう、今なのだ。

実はすでに夢から覚めているという事を改めて言うておかなければならない。

誰に？

さあ、あたしも理解できていない。

そしてあたしにとって大切なのは今現在だ。

あたしの今現在大切な事は

。

「お嬢様、朝ですよ」

「あと5分」

わずかばかりの睡眠だと言っておこう。

「あと5分」

「駄目です、今すぐ起きないと遅刻してしまいますよ？」

一度、寝づらそうに寝返りをして瞼を開けたため、今日は恙なく起床するかと思った少女は一瞬フランの顔を見ると再び布団の中にもぐり込んでしまった。

フランはため息をつきながら再度少女に起床を呼びかけるが、返ってくるのは「あゝ」だの「うゝ」だの言う少女の呻き声だけだ。

このままでは埒が明かないと判断したフランは部屋で少女の持ち物である私物を整理していたグラントに視線を送る。

「……仕方ないな。許す、やってしまえ」

しばし考えを巡らせた後、グラントは「ただしお手柔らかにな」と前置きしてからそう呟いた。そしてそそくさと部屋の外に出ると部屋にはフランと少女の2人だけになる。

グラントが執事としてはあまりよろしい行為ではないであろう、扉を随分と大きな音を立てて閉めると、布団の中にもぐり込んだ少女の身体が外からも見えるほどビクツと震えた。

「も、もしや……、今、2人、だけ……？」

「その通りです、お嬢様。さて、今お嬢様に許された選択は2つです。1つ、大人しく布団からお出になられて制服に着替えるか、2つ、あたしに強引に朝の清々しい風にその寒い恰好で放り出されるか、です」

「今すぐ起きる！」

布団がベッドの上で宙を舞う。

そして燃えるような紅い髪の毛がその陰から姿を現し、フランはにっこりと笑みを浮かべた。

「おはようございます、レティアお嬢様」

「あ、あなたねえ、いい加減主に対する態度を覚えた方が良いわよ……」

眠りの世界から脅迫まがいの事をされて引き戻されたレティアが恨めしそうにフランを睨み付けるが、フランの笑みはその視線を軽々と弾き返す。

「おや、あたしは何もしておりませんよ、お嬢様。それよりも早くお着替えてください。朝食は出来ています」

「まったく、いつからこんなに生意気に……」

レティアが不満げにそんな事を呟いた瞬間、フランの視線がレティアに照準を合わせた。

「お嬢様」

「な、何かしら？」

「先に謝罪しておきます。失礼」

「はあ                      ツ！？」

レティアが言葉の意味を理解するよりも早くフランは動いた。

まずは上だ。

レティアの身体の前にある6つのボタンを目にも止まらぬ速さで外すと反対側の手で真上に引く。服に引つ張られてレティアはいわゆる「万歳」の姿勢になり、フランはそうなった瞬間にパジャマの上を剥ぐ。

その時点でレティアが顔を真っ赤にし始めているが、フランはそれに意を介さずすでに用意されていたレティアの着替えを手にとるとレティアが露わになっている胸を隠す間も与えずにブラジャーを着させる。そしてその上からシャツを着せ、次は下に

「何やってるのよ!」

思い切り蹴られてしまった。

顔面にレティアの裸足の蹴りが思い切り入ったおかげで眼帯が外れそうになってしまい、慌ててそれを抑えていると燃えるような紅いオーラを身に纏ったレティアがその眼前に立ちふさがった。

「もう一度聞いわよ、フラン。あなたはいったい何をしようと、いえ、したのかしら……?」

「もちろんお召替えを

きゃっ」

再び蹴られる。



先ほどより軽めであつたが、それでも相当強い事に変わりはない。

「『きゃっ』って何よ！ あなた頑丈でしょうが！！」

「メイド長に『女の子らしい仕草』を覚えるよう言われたのですが」

「使いどころが間違つてるのよ！」

「はあ、お嬢様、何をそんなに怒つてらっしゃるのか理解できないのですが、このままですと朝食抜きですよ？」

「うぐっ……分かつたわよ。着替えるからもう勝手な真似はしないで……」

朝から大声を出す羽目になったレティアが心底疲れた声でそう言つと、フランは起き上がつて着替えをレティアに手渡す。

「お嬢様」

「ん、今度は何よ」

「おはようございます」

挨拶は大切だ。

こればかりは毎日欠かさず行っているからもはや習慣になっている。レティアはさっきまでの空気はどうした、とでも言いたそうな顔をしつつもフランに顔を向けると、小さく口を開いた。

「……おはよ  
」

「お嬢様、おはようございます」

「おはよう、グラント」

レティアが着替えを終えた頃合いを見計らってグラントが部屋に戻ってきた。

「うむ？ どうしたフラン、その顔は」

入ってすぐに、グラントは若干赤くなってしまったフランの顔に気が付いた。些細な事にもすぐに気が付ける観察眼が必要、という事を言っていたのはグラントであったかメリスであったか。

「お嬢様に蹴られました」

「おやおや、あまり暴力に訴えては駄目ですよ、お嬢様？」

「酷い目にあっただのはこっちなのよ！」

先ほどの事が思い起こされてレティアは耳まで真っ赤になる。

おそらく叫び声は外まで聞こえていたから、グラントも何故こういう状況になったのかは理解できているのだろうが、さすがにそれを面と向かって言う事ではない。

「お嬢様、暴れられると髪の毛がうまく……」

レティアは今フ란に髪を梳いてもらっている。紅く長い髪は背中  
の半ば程度まで伸びているため、自分で手入れするには些か面倒  
なのだ。

レティアは白色を基調とした、「制服らしい」制服を着ている。ブ  
レザーはボタンが正方形の頂点になるようにお腹の前にあり、胸元  
には獅子をモチーフとしたエンブレムがある。スカートは膝上数セ  
ンチといったところで、こちらも上に合わせて白を基調としている。

上下共に服の節々に青い装飾がされており、白を基調とした制服の  
中でその青が際立って見える。

「今日は激しく動くような予定もないから、軽めで良いわよ？」

「そう言っただけいつも家に走って帰ってくるように思えるのですが」

「あれは……、ほら、突然動きたくてうずうずしてるっていうか、  
なんというか……」

「……いつも通り、ポニーテールにしておきましょう」

レティアの髪型はひとえに髪型をセットする人間にかかっている。  
レティア本人がやりたいと言う時も稀にあるのだが、稀なために左右非対称になる事がほとんどだ。

それも考えた上での左右非対称ではない。言ってみれば「ツインテールにしようとしたら束が3つにも4つにもなる」レベルだ。

手先は器用なのだが、自分の髪の毛の話が別な様だ。

「あれっていつつも後ろの奴に引っ張られるのよ」

レティアが鏡越しに後ろのフランに視線を飛ばしてくる。

「引っ張りやすい所にあるのは否定できませんね」

綺麗にまとめて星のアクセサリーのついた紐でポニーテールを完成させると軽くレティアの肩を叩いてやる。

「ん、ありがとう」

「どういたしまして」

レティアは鏡でおかしなところがないか確認するが、特に目立った違和感も無いようで満足げに頷くと、椅子から立ち上がって部屋の扉へと向かう。

扉の横で待機していたグラントが扉を開き、レティアはノンストップで部屋を出てリビングへと歩を進める。

「うう、ようやく暖かくなってきたわね」

「確かに、今年の冬は一段と寒かったですからね」

「おかげでお嬢様がなかなか起きていらっしやらないので苦労しましたかね」

グラントが悪意のない表情、口調でそう言うが、先ほどのフラン同様ダメージをレティアが受けている。

「まったく、うちのメイドも執事も、どうしてもこう主を敬わないのかしら？」

「敬ってますよ、お嬢様」

声を揃えてフランとグラントが良い笑顔をしてみせる。

これだけでレティアを撃沈させるには十分だ。

結局のところ、この屋敷ではメイドも執事も家族同然に近い。

そのため、相手が主であっても態度が激変するような事はない。皆同じように接している。

これを始めたのは他でもないこの屋敷の主、つまりはレティアの父親である。

クラウド・ファルケン、ファルケン家現頭首にしてこの国グラデアラス王国の大臣の地位にいる。他人にも自分にも厳しく、自ら率先して仕事を受けるためどうしても屋敷に帰ってくる機会が少なくなっており、現在も1週間も屋敷に戻ってきていない。

ファルケン家は代々王に仕える重役の地位にあり、クラウドもこの国に3人いる大臣職の椅子の1つに就いている。この3人は三本柱とも呼ばれており、この国の重要な政策や案件に対して強い権限を持っている。実質、国のナンバー2である。大臣の間で地位の差はないため、協力し合って政治を行っているそうだ。

クラウドはその中でもまとめ役のような存在で、それまで陰悪だった議会と大臣との軋轢を埋め、王の声が国の隅々まで届く様にインフラ整備を推し進めている。

そのせいか出張で遠くに行くことも多く、そういう際はグラントがお供している事もある。

ともかく、レティアの父親であるクラウドはなかなか屋敷に戻ってこない。

そのためレティアが実質上の主のような地位になっている。基本的にはフランたちメイドや執事はレティアの言う事は聞くが、当然クラウドの命令の方が上位に存在していることも忘れていない。

いざという時の優先順位というやつであろう。

「はあ、……と、そういえば明後日までの宿題があったんだっけか」

「はい、魔法学45ページ掲載の炎系魔法を形にしておくようにと、ありました」

「忘れてた、どうしよう、さすがに間に合わないかも」

「ですから、今日明日は徹夜の御覚悟を」

グラントがニヤリと笑みを浮かべる。

この世界に生きる人間は、生まれながらにして精霊と契約している、  
と言いつ伝えられている。契約する精霊の種類によってその者が使用  
できる魔法の種類も変わるとのことだ。

例えばレティアは炎の精霊と契約している。契約の証である燃える  
ような紅い髪と、目を持っている。

その者の髪の毛と目の色は契約した精霊の種類によって決まるもの  
だが、基本的にその血筋は受け継がれるものだ。両親が炎と水の精  
霊と契約していれば、その子はそのどちらかとなる事が大半を占め  
ているが、もちろん例外は存在し、まったく違う精霊と契約してい  
ることもある。

「うう、そのまま翌日寝坊したい……」

「ご安心を、お嬢様。時間きっかりに起こしてさしあげます」

「フーラーン」

レティアは前者だ。

父親であるクラウスの血を色濃く受け継いでいる。

「グラントさん、あたしを同席しても？」

「課題にか？ それは構わないと思うが、どうするんだ？」

不意にフランがグラントにそう尋ねたので、グラントは意外そうな顔をした。そして一瞬フランの腰にぶら下がる30センチを超える大きさの銃に視線を向ける。

「最近鍛錬を怠ってしまっているの、グラントさんにご指南をと思ひまして。お嬢様の課題も助言くらいは出来ると思うのですが…」

「フラン、前にも似たような事をして酷い目に合ったじゃない。あなたの説明って擬音が多すぎるのよ」

「ま、前とはもう違います。あの頃はまだ、その、言葉もあまり覚えてませんでしたし……」

レティアが呆れたような表情でそう言うと、フランは若干頬を赤らめて言い返した。

「お嬢様、問題ないでしょう。それに、私も久々にフランの腕を確認しておきたいです」

「グラントがそう言うなら別に構わないけれど、次の日仕事が出る程度に手加減しておいてよね？」

「前は2日ほど寝たきりにさせてしまいましたからね」

「思い出したくもない……」

メリスとは違い、グラントには護身術などもフランは教わっている。グラントは執事の嗜みとして主人が危機の時それを乗り切るだけの



技術と経験が必要だと常々言っており、フランとも組手や実戦形式の訓練を行っている。

素手での近接戦闘から、魔法を交えたより現実的なものまで、その種類は幅広い。

なんでもグラントは依然国軍で嘱託講師をしていたらしい。要は兵士の教育係を務めていたのだ。グラントは茶髪、世間一般に土の精霊と呼ばれる精霊と契約している。

炎や水と違ってそれ自体を作り出すと言う訳ではなく、既に存在する土や石、砂と言ったものを自在に操る事が出来る。これは他の魔法とかなり勝手が違い、後先考えずに使いすぎると自分の足元を言葉通り掬われることになると言う。

「よし、それじゃ今日は帰ってきたら早速特訓ね。中庭を使いましょう」

「分かりました。では用意をしておきましょう」

「頼んだわ、グラント」

このファルケン家の屋敷は町の真ん中に近い場所にある。当然隣にも家が並び、前の道を行き交う人の数もそれ相応に多い。夕方から夜にかけて魔法の練習などすれば、近所迷惑になってしまうのは目に見えている。

「土結界は防音性に優れていますからね」

「うむ、このような使い方をすると考えもしなかったがな」

人間が作り出す結界はその者が契約している精霊の種類で異なる。

グラントの場合は土で作りに出される結界、レティアであれば炎を薄く伸ばしたような結界を作る事が出来る。この場合、物質的な意味でグラントの結界は防音性に優れている。

結界と言っても外と中の世界を切り離すだけで、それが存在するこ  
とは見ればすぐに分かる。特に夜中に炎の結界など作れば、かがり  
火になって安眠妨害になるだろう。

「お嬢様の魔法はよく爆発しますからね」

「仕方ないじゃない。水とか雷と違って調整が難しいのよ」

レティアがふて腐れて顔を背ける。

そんな他愛もない会話をしている間に、3人はリビングへ到着した。  
既にそこにはメリスやクレアが集まっており、レティアの起床を待  
っていた。

「「「おはようございます、お嬢様」」」

「おはよ。ってもうこんな時間!?!」

リビングの壁掛け時計に目をやってレティアの眼が見開かれる。

「ですから、早く起きてもらいたかったんです」

「くっ、朝食を逃す訳にはいかないわ。すぐに持って来なさい！」  
ファルケン家の朝はいつもにぎやかだ。

余談だが、フランはハムの原産地を問われてまともな答えを出す事も出来ず、グラントにことごとくフォローされる羽目になった。

## 第02話 メイドの仕事に他意はない（後書き）

ひゃっほーい、どうも、こんにちは、こんばんは、おはようございます、ハモニカです。

序盤くらい書き溜めしてある話をチマチマ修正しつつ連続して出そうと思った次第であります。

順調な滑り出しになればいいのですがねえ。

では。

誤字脱字報告、ご感想、お待ちしております。

### 第03話 メイドは案外昼が暇（前書き）

存外順調に執筆が出来たので3日連続で投稿。

### 第03話 メイドは案外昼が暇

「行ってきますー!!」

「行つてらっしゃいませ、お嬢様」

レティアが慌ただしく屋敷の玄関から飛び出していく。

結局、朝食を流し込むようにして食べ終えたレティアはグラントが持っていた学生用のカバンを引つ手繰ると踵を靴に入れる暇すらなく走り出していた。

フランとグラントがそれを見送り、レティアが見えなくなるとそこでようやくフランは大きく伸びをした。

「朝の仕事終了、と」

基本的に、主がいない屋敷のメイドと執事は仕事がない。もちろん、庭の手入れや掃除は必要不可欠だが、何も全員でやる必然性はない。シフト制になっているため、シフトがない者は朝とレティアが帰ってくる夕方から夜にかけてしか仕事がないという場合もある。

そういう場合、住み込みの者は自室でプライベートな時間を過ごしたり、グラントのような自宅通勤の者は一度帰宅するという事も出来る。

シフトは何が起こっても対処できる最低限の人数が確保されている

ため、突然の来客などにも対処は出来る。

とは言うものの、来客者はほぼ屋敷の主人に用があるのだからフ란たちとしては何も出来ない事の方が多いのだが。

グラントは喉の所までしっかり締めていたネクタイを緩めると一息ついて屋敷の中へと戻っていきこうとする。執事の制服を着こなすグラントは凛々しいが、ネクタイを緩めるとワイルドさが加わる。

「グラントさん、中庭に結界を頼めますか？」

フランは玄関から中に入ろうとしていたグラントを呼び止め、そう頼み事をする。

「練習か？ 分かった、用意するから少し待ってくれ」

グラントはさして気にする様子もなく屋敷に入ろうとしていた身体を翻して中庭へと向かう。

この屋敷の特徴の敷地面積に対して屋敷が比較的小さいという事だろう。そのため必然的に庭が占める割合が増え、丹精込めて育てられた花や井戸水を使った小さな池も作られている。休憩時間には池の近くで疲れを癒す者も少なくないし、フランもその中の1人だ。

中庭の中でも周囲に何も無い開けた場所に出る。そこは表からは見えない場所にあり、そこだけ芝生がなく茶色い土が露出している。

グラントは土が露出している場所に立つと小さく息を吸い込む。

その瞬間、土が浮かび上がる様に地面からそそり立ち始め、2つの

分厚い土壁が並行して構築される。フランとグラントはその壁に挟まれるような位置に立っており、壁は高さを増すと徐々に角度をつけ始め、ついには2人の頭上で結合、トンネルのような形になる。

壁には等間隔で穴が開いており、中にいてもそれほど暗さを感じる事はない。

「目標はどのくらい必要だ？」

「そうですね……、200個ほどお願いします」

「夜の鍛錬に向けて気合が入っているな」

「久々にグラントさんに教えてもらえるんです。この機を逃す気はありません」

フランの言葉にグラントが少し照れつつも嬉しそうな笑みを浮かべる。

その間にもフランが要望した「目標」の構築を開始する。壁から突き出るように円状のものが突出し、トンネルの向こう側に小さな突起が姿を現す。

「フランのおかげで土の操作が随分と上手くなったな。本を読みながらこれくらいなら出来そうだな」

「前はいつも嫌な顔をしていましたよね」

「当たり前だ。3時間も4時間も土とにらめっこなんて、普通は無理だ」



グラントはため息をつく、とトンネルから出ていく。

「練習を止める時に声をかけてくれ。それまで私は読書だ」

「分かりました。ありがとうございます、グラントさん」

フランが礼を言うとグラントがヒラヒラと手を振る。

フランはグラントが視界から消えると目の前に向き直り、無数の的を見据える。現在トンネルの向こう側までで見えている的は5つほど、土で出来ている事を利用して不定期に壁の中に戻ったり、地面に潜ったりするようになっており、狙いをつけるのは容易ではない。

腰の後ろに回していたホルスターから黒光りする銃を取り出すとポーチから鉄球を無造作に取り出す。

シリンダーを取り出すと6つある穴に鉄球を入れていく。この作業は地味に面倒臭く、1つひとつ入れていると最短でも10秒かかってしまう。そのためフランは平べったい円柱状の道具を使う。

判子のような持ち手がついており、底面にはシリンダーの穴の大きさに合わせたへこみが付いている。鉄球をあらかじめこのへこみに入れておくことで、装填の時間を大幅に減らせるようにしているのだ。といってもこの方法はフランが考えたものではなくいつも1個ずつ装填しているフランを見てグラントが試しにと考案した方法だ。これのおかげで鉄球が穴に入らず地面に落ちるというストレスが生まない事が起こる回数は激減した。

鉄球を装填するとシリンダーを元の位置に戻して一息つく。

「ふう

」

目を開き、銃を持った右手をまっすぐ伸ばす。

「『アフエシマス』起動」

小さくそう呟くと、銃身の溝が仄かに光り出す。青白い光は銃身からシリンダーへ、そしてグリップへと伸びていき、銃を持つ手までその光がたどり着くと光の線はグリップから手の甲へと乗り移ってくる。

『アフエシマス』というのはフランの銃の名前兼この青白い光の線を擁するシステムの名だ。

この銃は前時代のように火薬を使用して弾丸を発射するものではなく、使い手の魔力を爆発させて弾丸を発射する。

そのため銃に魔力を供給するラインが必要だ。それが青白い光の正体である。

フランの手の甲まで伸びた光の線はそこで止まり、銃へフランが持つ魔力を吸出し供給する。

このシステムにより理論上持ち主の魔力が枯渇するか、弾がなくなるまで撃ち続ける事が出来る。銃身の摩耗も多少影響を受けるが、ほとんど気にならないほどだ。

いつからこの銃を持っているのか分からないが、不思議と身に着けていると心が穏やかになる。

「あたしの過去の記憶と今を繋ぐ唯一の……。フフ、何を言ってるのやら……」

記憶を失うと言うのは不思議な気分だ。

きつと失いたくなかった大切な記憶もたくさんあったのだろう。

だが、記憶を失うと記憶を取り戻したいという気持ちとどうでも良い、という2つの意識が生まれる。きつと思いださない方が良い記憶があるだろう。

自分がまともな幼少期を送っていなかったであろう事は自分の顔の左半分を見ればすぐに分かる。

物心、と言っているのか定かではないが、この屋敷に来てからの記憶しかないフランにはそう形容しなければならぬものが身についた頃から、何故かこの銃だけは手放す気にはなれなかった。

そして今日も身体の一部になってくれている。

『アフエシアス』が起動されると青い光の帯が魔力を銃に供給するパイプとなる以上、身体の一部になるのは当然だ。そして銃が自分の身体の一部になる様に、フラン自身も銃の一部となる。

呼吸と心臓の鼓動を同調させ、手振れを最小限にまで減らしていく。意識を銃と標的に集中させると不意に周りの音が静かになって自分の呼吸と心臓の鼓動が異様に大きく聞こえるような錯覚に襲われる。

「すう

」

狙うは一番手前の標的だ。直線距離にしておよそ15メートル、中央に円状の模様が描かれているそれに流れるような動作で銃口を向けると間髪入れずに引き金を引く。

バガンッ！！

到底それが発するとは思えないほど巨大な発砲音が響き渡る。

アフエシアスはいわゆるダブルアクションの銃だ。引き金を引くだけで撃鉄が上がり、下ろされるという2つの動作を行う。火薬の代わりの魔力に引火し、装填されていた鉄球が猛然と発射されると標的のど真ん中を寸分の狂いもなく撃ち抜く。貫通した鉄球が土の壁にめり込むが、強靱な壁はその貫通は許さない。

撃ち抜かれた事を確認するかのように少し間を開けると中央を穿たれた標的がボロボロと崩れてただの土くれに戻る。

「腕は鈍ってなさそうですね……」

自分の肩が違和感を持っていないか確認しながらフランは独り言を呟く。

銃を握る右手の中指、薬指、小指を開いたり閉じたりさせながら、銃を手に馴染ませる。指を開いたとしても、青い光の帯があるため銃が手から落ちるような事はない。逆に言えば銃を手放したければ『アフエシアス』のシステムを停止させる必要がある。

銃を使っている1つだけ自分の身体に感謝をした事がある。自らの隻眼だ。

健全であれば、左右の目のわずかな距離の違いから誤差が生まれてしまう。それを人間の脳は修正して焦点を合わせるわけだが、隻眼であるフランはそもそもそんな事をする必要がない。右目から入る視覚情報をそのまま利用することが出来るのだ。

その事を呟いた時、グラントが複雑そうな顔をしていたのは物忘れがひどいフランにしては珍しくはつきりと覚えている。

バガンツ！

また引き金を引く。

今度は30メートルほど先、トンネルの右に寄った地面から突き出した土の人形の頭部を撃ち抜く。

だが、今度はそれで終わらず右から左に銃を動かしていき、その過程で銃口の前に来た標的を左に移動させるという動作の過程で排除していく。

標的に合わせて発砲、また合わせて発砲という訳ではなく、全体の流れの中でその狙いを定めると言ったところだろうか。

何も考えず、ただ視界に入る標的を次々と撃ち抜いていく。

ある程度標的が減ると新たな標的がトンネル内に追加される。その

うち上下左右に動くような標的まで現れ始めるが、フランはその未来位置を正確に予測して標的の中央に鉄球を撃ちこんでいく。

（右……右……左……下……そこ）

動く標的はその規則性を見出す必要がある、とグラントに言われた事がある。

だが、正直フランにはそれをする必要はない。

物体が動くその寸前の、その刹那の瞬間を捉えてフランは次に標的がどの方向に動くか容易く予想出来てしまう。

6発全てを撃ち切ると、視線を向ける事もなくシリンダーを外し、鉄球を補充していく。この動作1つ取っても、一切の無駄がなく、必要最低限の動きで行われる。

鉄球を装填すると軽く銃を振ってシリンダーを元の位置に戻し、再装填の間も睨み付けていた標的に銃を向け素早く引き金を引く。

次々と標的を破壊していく様子を見ると、フランは無意識のうちに笑みを零していた。

（アフエシアスは裏切らない）

この銃は自分の思い通りに動いてくれる。身体の一部と称したが、そうじゃなくともフランにとって頼もしい相棒であることに違いはない。

（絶対に……）

それはもはや確信の域に達していると言っても過言ではない。毎日欠かさず手入れを行い、塗装以外は常に万全の状態を維持させている。塗装は1回に数百発撃つため新しく塗ったとしても簡単に剥げてしまうため放置している。そのため日に日に黒い塗装が剥けているのだが、フランはあまり気にしている様子はない。

引き金を引く度に銃口から帯の色と同じ青白い発砲炎が一瞬トンネル内のものを青く照らす。

「あつ……」

そんな事を考えていたせいか、標的を1つ撃ち漏らしてしまった。撃ち漏らしたと言っても中央に命中させる事が出来なかっただけで、標的自体にはしっかり弾痕が残されている。

「65発中64発、と」

外したところまでに撃った数を確認し、頭の中で反芻させる。

「65人目がお嬢様に襲い掛かるかもしれない、と」

これは自己暗示に近いものだろう。

実戦で外したらその敵がレティアや友人に凶刃を向けるかもしれない。強迫観念じみたそれを頭の中で繰り返し呟き、自分の中で「絶対に外さない」という決意をする。

「……………よし」

しばらくして銃を地面に向けて頭の中の整理をしていたフランは目を開き、気を取り直す。

標的の動きは止まっていた。

おそらく銃声が途絶えたのに気が付いてグラントも一息ついていたのだろう。フランが黙ってトンネルの壁を軽くノックすると、それまで動きを止めていた標的が一斉に動き始める。

ほとんど無作為とも言える標的の動きは、全てグラントによって遠隔操作されている。

つまり、同時に数十個の標的に意識を集中させ、なおかつ破壊されたものは破棄し、その分新しい標的を作り出すという作業もしているのだ。

フランは感謝しつつも、よく頭がパンクしないものだ、と内心舌を巻く。

その後、フランは自らの胃が空腹に悲鳴を上げるまで引き金を引き続けた。



「ん、休憩か」

空腹に胃が悲鳴を上げたのをきっかけにフランの命中率は著しく低下した。一度腹の虫が鳴くとどうしても昼食の事が脳裏を過り、特訓に集中できなくなってしまったのだ。

そうじゃなくとも既に数時間銃を引き続けたのだ。そろそろアフエシアス自体を休ませないといけない頃合いだ。おそらく今この銃に液体をかければあっという間に蒸発してしまうだろう。

「空腹には勝てないようなので」

「腹が減っては戦は出来ぬ、とも言つ。デックスに昼食を作ってもらおう」

トンネルから少し離れた小さなテラスで椅子に座って優雅なひと時とでも言うべき時間を過ごしていたグラントは読んでいた分厚い本を閉じるとゆっくりと立ち上がり、フランのために作り出していたトンネルを地中に戻していく。

するとトンネルがあつた場所からフランたちのいる方へ地面が波打つように動き、フランの前まで来ると盛り上がり地面から小さなお盆のような物体がせり出してきた。そのお盆の中には銀色に光る鉄球が入っている。フランが撃った鉄球を全て回収してきたもので、フランはグラントに礼を言うのとそれをまだ撃っていない鉄球とは違うポーチに入れる。

この鉄球はあまり無駄にして良いものではない。

魔法技術が発達するこの世界では銃のような武器自体が稀有な上、その弾丸ともなるとそれこそ製造しているような奇特な人間はいない。この鉄球にしても、デックスとグラントが調理場で作った代物なのだ。

屋敷の廃品にするしかない金属のものをかき集めて熱し、液体になったらグラントが作り出した土の型に流し込んで鉄球を作った。いわば2人の汗と涙の結晶と言える。血は流していないので除外される。

そういう訳であるため、回収できないような事が無いようにしている。

現在鉄球は全部で400発ほどあるが、ポーチに入れているのは200発ほどだけだ。残りはフランの部屋の引き出しの中に収められている。

屋敷の中に戻り、廊下をグラントと共に歩いていると反対側からメリスが音もなく歩いているのを視界に捉えた。

遠くから見ても、それがメリスだとすぐに分かるのはその歩き方、仕草、どれを取っても際立っているからだろっ。

「あら、その組み合わせを見るに練習をしていたのかしら？」

メリスはこちらに気が付くとニコリと笑みを浮かべながらそう尋ねてきた。

グラントの土結界は防音性に優れているため分厚くすれば壁の反対側でも一切音が聞こえないというくらいのものが作れる。おかげでこのように屋敷の中という極めて至近な場所でも銃声は聞こえない。

「ああ、今夜手合せをするからその練習だそうだ」

「手合せ？ レティアお嬢様の宿題のついで、と言ったところ？」

「はい、もちろんお嬢様の宿題が全て終わったら、という話で終わらなかったらそちらを優先しますが」

「そうならないように頑張りなさいな」

ふふつと笑いながらメリスはグラントの脇を通り過ぎて今フランたちが歩いてきた道を進んでいく。

そしてその途中で思い出したように足を止めて振り返る。

「昼食ならリビングの机に置いてあるわ。私とクレアは頂いたから後は2人で食べて大丈夫よ」

「それはすまないな。だがメリス、あまりクレアをいじめてやるなよ？ 先ほども声が聞こえてきたが」

グラントが苦笑しながらメリスに言うと、メリスは物凄く良い笑みを浮かべてみせる。

「あれはいじめじゃないわ、賤けよ？ そもそも掃除のはずが汚れを増やすんだから、私じゃなくとも叱咤の1つするわよ」

「クレアはたまにおっちょこちよいですからねえ」

「あらフラン、あなたがそれを言うのかしら？」

「うぐ……」

うつかり漏れたフランの呟きに素早くメリスのツツコミが入る。

メリスは最後に小さく手を振ると曲がり角を曲がって2人の視界から消える。

それを確認してからグラントはフランに顔を向けた。

「フランの最初はクレア以上だったからな」

「……言わないでください。少なくともお皿はもう割りません」

「ならいい」

グラントが父親のようにフランの頭を撫でる。フランも少し恥ずかしそうな表情はするが嫌がるそぶりは見せない。

グラントが父親なら、さしずめメリスが母親と言ったところか。

そんな事を想像してメリスの厳しい教育風景を思い出したフランは人知れず身震いをしてしまった。

### 第03話 メイドは案外昼が暇（後書き）

むきやー、男少なめとか言っておいてもう2人出てきてるじゃないですか！

……ですが！

全体で見ると相当少ないんです！

きつとそうなる予定！

では！

誤字脱字報告、ご感想お待ちしております。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5890z/>

---

銃と魔法と眼帯とメイドモノ！

2011年12月21日21時50分発行